風景デザインレター from 九州(第34号)

先週、盛況のうちに JCCA 主催の「生物多様性戦略」の講習会が終了しました。事務局幹事として、ホッとしたと同時に、九州の動きの遅さをつくづく感じてしまったところです。特に、「生物多様性オフセット」「生物多様性バンキング」そしてそのバンカーたち。PFI をやっていた時同様に、ビジネスの仕組みを先取りしないと、まずいぞと思った今日この頃です

生物多様性の講義を聞きながら、考えたこと（その２）

【生物多様性バンキングと日本の風景の未来】

今回の講習会の一番の収穫は、東京都市大学（旧武蔵工業大学）田中先生の「生物多様性バンキング（里山バンキング）」の講演でした。米国ですでに動いているミチゲーションバンキングのことだと思いますが、仕組みは次のようなものです。

開発業者(主に民間事業者)は、新たに事業を行う際に、その事業地に存在する自然の価値を自力で同等なものに復元できない場合は、その価値に相当する環境を自然復元事業者から復元実績を購入するというもので、今までの環境への配慮努力をお金で買うというもの。

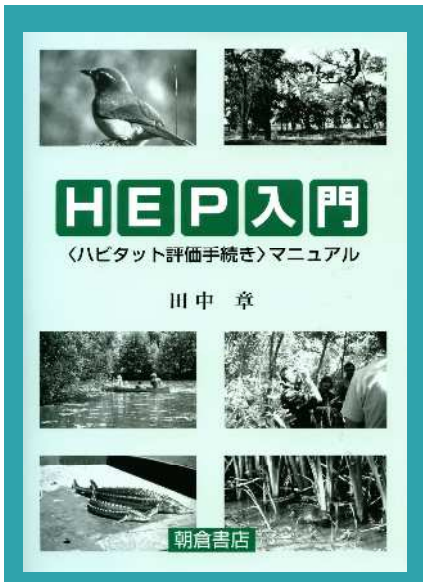
つまり、極端にいえば、事業のたびに自然復元の専門家が集まって環境保全に関する BEST のプランを検討し、実施するのではなく、自然復元の専門家がつくった自然復元バンクに預金している「新たな環境の価値」を購入するということです。自然復元の費用は、潰してしまう環境の価値に合わせて算定され、その算定された額をミチゲーションバンカーに支払うもので、通貨と同じように、等価交換の市場をつくるものです。先生の話では、世界には、すでに 50 カ国以上の国々にその仕組みがあり、日本は、またしても後進国であることを強調されていました。

さて、我が国において、その制度を諸外国に負けずに設立したら、日本の風景はどう変化するのか、思考実験してみます。

まず、バンカーは、まず価値の低い場所（放棄耕作地や荒れた山林、あるいは、埋め立てられた海岸等）を探し、復元事業を自前で、あるいは銀行団を加えたコンソーシアムを設置し、復元事業を効率的効果的に実施することになります。その際、開発事業地よりあまりに離れていると環境の同等性が評価されない恐れがあるので、なるべく近くに、つまり、開発ポテンシャルが高く、荒れた自然の場所が近くにあることが条件となります。開発ポテンシャルが高ければ高い場所では、まとまった自然復元事業が成立しやすくなるということで、もしかして、明確な土地利用の再編が可能になるかもしれません。新たな住宅団地・工業団地として開発された土地に隣接して、あるいは同じ流域内に自然豊かな空間が新たに創出される。

あるいは、開発ポテンシャルが高くない場所でも、自然復元の価値が高く見積もることができる場所があるのであれば、その地域の自然復元は、一気に進むことになります。そのような場所を探すのは、ミチゲーションバンカーたちの仕事。民間事業者ですが、多分に環境復元技術と評価技術を持ち合わせることが必須で、ここに私たちの出番があると田中先生はコンサルタントにエールを送ります。

当然、このような仕組みが実現するには、生態系の定量評価技術がしっかりと根付いていなければいけませんし、また、定量評価技術だけでなく、生態系の価値を経済的に評価する、いわゆる環境を金銭評価することが求められると



思います。この点について田中先生は、客観的な金銭評価は必要なく、市場の需要と供給の価値で決まるものであるとおっしゃっていましたが、それは、恐らく市場というものが成立する、多くの需要と供給が存在した上の話で、最初は、金銭的な価値の等価交換ということになると考えられます。

ともかく、環境保全や国土保全について、公共事業だけに任せておくことができない社会になれば、新しい制度や仕組みが導入されて、そこに民間の参入ということは必然だと思いますが、その際、その制度の導入によって、どのように環境が変わっていくのか、長期的にいい方向へ向かうのかそうでないのかを見極める知力は必要です。

今まで、中山間地域の荒廃する風景を、「第三の公」等の NPO と公共の中間的な存在による方策を、「共助研」をつくり考えていましたが、このような市場原理を導入した手法が入ってくると一気に変わるものと思われます。

本当に望ましい風景を維持するための有り様について、想像力と知力を総動員して考えなければ、取り返しのつかない世界が待っているかもしれませんし、また、ビジネスを展開する自分たちの活躍の場をしっかりと確保することも必要であるとも考えます。【続く】